NHK《ラジオ深夜便》より

忘れられたノーベル賞学者ロートブラット

岡崎 恒夫

今年のノーベル生理学医学賞を京都大学の本庶佑先生が受賞しました。今から 23 年前にポーランドの物理学者がやはりノーベル賞を受けたことは実はポーランドでもあまり知られていません。今日は日本とも大いに関係のあるこのポーランド人ユゼフ・ロートブラット(1908～2005)についてお話します。

ロートブラットは 1908 年にワルシャワで荷馬車運送業者の息子として生まれました。小・中学校を経て職業学校で電気関係の技術を学び、後年ノーベル平和賞を受賞したレフ・ワレサ氏と同じ電気工として働いていました。しかし、勉学への思いが強く、高校卒業資格の要らないワルシャワ自由大学に入り物理学を修め、1938 年には現在のワルシャワ大学で博士号を取得しています。そのころ結婚した彼の妻トーラは第二次世界大戦中に強制収容所で彼の母親、弟妹とともに命を落としました。

彼は第二次世界大戦勃発前にイギリスに渡り、リバプール大学で研究をつづけました。戦後 1955 年に、20 世紀最大の哲学者と言われるバートランド・ラッセルが米国のアインシュタインや日本の湯川秀樹に呼びかけ、核兵器廃棄を唱えたラッセル=アインシュタイン宣言を発表し、それを基に 1957 年カナダのパグウォッシュで科学者による平和を目的として立ち上げられたのがパグウォッシュ会議で、その創設者がロートブラットだったのです。

彼は第二次世界大戦中に英国の学者に誘われ米国の原子爆弾製造「マンハッタン計画」に参画しました。しかし、原子爆弾が出来上がる前に、ナチスドイツには原爆を作る能力がないことが分かった時、マンハッタン計画から離脱しました。彼はこの計画に参加した学者の中で唯一、途中で離脱した人としても知られています。第一次世界大戦と第二次世界大戦を経験したロートブラットは必ず第三次世界大戦が起き、その時には核戦争になると思い、それを止める手立ては平和運動しかないと考え、パグウォッシュ会議を立ち上げたのです。

社会とは無関係であり得ない科学者の道義的責任は重く、学問の結果が戦争で大量殺人に使われることは絶対に避けるべきだと、毎年世界各地で集まりを持ち、1976 年には第 25 回会議が京都でも開かれました。1954 年に米国がビキニ環礁で行った水素爆弾の実験のため日本の第五福竜丸が死の灰を浴びて、久保山愛吉さんが亡くなった事件では、ロートブラットが死の灰のサンプルを取り寄せて調査した結果、危険区域外にいれば安全だとした米国の虚偽を暴露しました。

彼は自分の創設したパグウォッシュ会議とともに 1995 年にノーベル平和賞を受賞しました。ではなぜロートブラットはポーランドであまり知られていないのでしょうか。「私はイギリスのパスポートを持っているが、ポーランド人です」と言い続け、ノーベル賞授賞式の会場ではショパンの「ポロネーズ」を流すよう要請し、英国人の同僚にはしばしばポーランド最大の詩人ミツキエビチの言葉を引用したにもかかわらず、なぜポーランド国内ではほとんど顧みられなかったのでしょうか。一つは彼が鉄のカーテンの両方の政治家との間を核兵器廃棄の目的で取り持ったことによるのか(ゴルバチョフは彼を友人として遇した)、一時とはいえマンハッタン計画に参画していたことによるのか、1983 年に連帯労組委員長レフ・ワレサがノーベル平和賞をもらったことの陰になってしまったせいか、答えは誰もわかりません。

2013 年にノーベル平和賞受賞者をワルシャワに集めて行われた平和会議でもロートブラットの名前が挙がらなかったのは不思議というほかありません。　（おかざき・つねお、ワルシャワ大学上級講師）

写真 ノーベル賞を受賞したロートブラット (1995)
https://www.atomicheritage.org/profile/joseph-rotblat

札幌国際芸術祭〈SIAF2020〉
[テーマ] Of Roots and Clouds ここで生きようとする
（アイヌ語）シンリッ / ニシクル
会期：2020.12.19（土）～2021.2.14（日）

この芸術祭の準備に WRO アートセンター(ポーランド・ヴロツワフ)のアグニエシュカ・クビツカ=ジェドシェツカさん(企画ディレクター:メディアアート担当)とマグダレナ・クレイスさん(キュレーター:アートメディエーション担当)が参画しています。2019 年 7 月 27 日(土)札幌市資料館でお二人の案内で「**ファミリー向けプログラム:Cześć** (ちぇしち=こんにちは)! ～ポーランドのアニメーションをたのしもう!」が催されました。(安藤厚)

2018 年 1 月 10 日には拙訳編書『ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌』が東北アジア研究センター叢書第 63 号として上梓されます。同書はピウスツキの樺太島にかかわる人類学的労作 11 篇の邦訳と、参考論文として拙稿「樺太島におけるチュフサンマとその家族」も収録しています。本稿で紹介する木村愛吉関連情報は同論文から抜粋しました。詳しくは同書をご覧ください(非売品ですが、国内外の主要な大学図書館に寄贈されます)。

上記拙稿で本件に直接かかわる「エピローグ」から、最末尾の一節を以下に転載します。

(北海道)大学の「アイヌ遺骨等返還室」は木村氏の請求を審査し、近い将来には、「バフンケ頭骨」を正統な遺族に返還するか否かを決定するであろう。その回答がいずれであれ、北海道大学は以下の設問に対し、誠実に答える責務を負っている。

(1)一九二〇年の埋葬後十六年しか経っていない木村愛吉の墓は一九三六年八月一日、相濱のエンチウ墓地で、果たしてどのように、何故、また誰によって、暴かれることになったのか。

(2)「相浜1」が木村愛吉に帰属することを立証する議論の余地のない根拠は何か。「樺太酋長バフンケ」なる名称が、他の七十体のエンチウ遺骨とは違って、例外的に記録されえたのは何故か。

(3)北海道大学は木村愛吉の頭蓋骨取得以降八十年の長きにわたって、その存在を学外、なかんずく彼の子孫へ向けて発信することを怠ってきたのは何故か。

(いのうえ・こういち、北大名誉教授、2017.10.25)

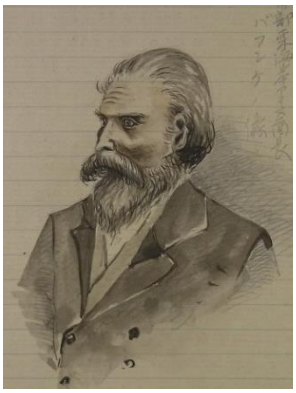

写真 1(左)ピウスツキ撮影の木村愛吉氏(1902-1905)この人物を初めてバフンケと断じたのはサハリン州郷土博物館の M・M・プロコフィエフ氏。その経緯と論証に関しては上記拙稿(注五、三〇)を参照。

写真 2(右)南部東海岸アイヌ酋長 / バフンケノ像(北海道博物館所蔵手稿、太秦供康「明治三十八年 樺太出征日誌」より)

NHK《ラジオ深夜便》より

ポーランドの住所表記

岡崎 恒夫

留学から帰ってきた教え子がしばしば日本の住所を探すのには骨が折れるといいます。今でこそ GPS を頼りに探せばさほど難しくないのでしょうが、日本の住所表示のシステムはわかりにくいようです。

日本では○○県○○市○○町○○丁目○○番地という風に表し、大きい行政区から小さい方に向かって書きます。ところがポーランドでは先ず通りの名前、その次は建物の番号があって最後にアパートの番号が来ます。その次に市の名前が来ますが、県名は書きません。そのシステムは非常にわかりやすく、初めて訪ねる場合でも、どこにその通りがあるかを知っていれば(もちろん地図にはそれが記されています)容易に建物にたどり着くことができます。日本の行政単位は県から町までは面ですが、ポーランドのそれは市以下が線(○○通り)になります。

例を挙げましょう。日本では○○町の中に○○丁目がパッチワークのように張り付いています。例えば 1 丁目の側に 2 丁目がありますが、それが上下にあるのか左右にあるのかわかりません。したがって 1 丁目の右に 2 丁目があり、左に 5 丁目があるという事態が生じます。ポーランドの場合はこの丁目に当たるのが通りで、すべて線で表されます。つまり、その町に存在するすべての通りに名前が付けられているのです。そしてその通りに沿った建物の番号は、町を流れる川に平行して走っている通りの最も小さい「1 番」がその川の上流から始まります。完全に平行でなくて少しぐらい角度がついていても同じ原則です。次に川と直角に走っている通りは、川に最も近いところから 1 番が始まり、川から遠のくにつれてその番号が増えていきます。そして、道の片側は奇数番号、反対側は偶数番号が振られています。

ここまで聞いて皆さんは、では一体通りの名前はどうなっているのかと思われることでしょう。そこで、ポーランド最大の都市ワルシャワの通り名を数えてみたら、4,000 をちょっと上回る数でした。と言うことは他の町はこれよりもっと少ないと言うことです。市の道路局が、この 4 千もの名前を付けるのは大変だろうと思われるでしょう。お察しのとおり、名前を付けるのに相当苦労した跡がうかがえます。従来の通

りのほか、新興住宅地の通りにも名前を付けなければならないので、大変な作業だろうと察します。

この住所表示システムは、中世から採りいれられていて、古いものは王様の名前、王族や貴族の名前など歴史的人物の名が使われています。次に国家の英雄、将軍の名が使われたり、またその通りの行き着く先の大きな町の名前が使われたりします。したがって、どこの町にもたいてい「ワルシャワ通り」「クラクフ通り」があります。

私が住んでいるアパートは戦前は農地だった所に建った団地で、「マハトマ・ガンジー通り」と言います。近くにはやはりインドの大詩人タゴールの名を冠する通りがあります。

ポーランドの歴史的人物、例えばショパン、キュリー夫人、コペルニクスはもちろん、ナポレオン、シェークスピア、モリエール、ピカソ、コロンブス、ウイルソン、パスツールなどの名前も見られます。

（おかざき・つねお、ワルシャワ大学上級講師）

目　次

《第 82 回例会》コルチャック先生:講演と映画の集い／〈パネル展示〉 …… 1
創立 30 周年祝賀会（村田譲） …… 2
波蘭見聞録（大塚広介） …… 3
ポーランド＆ニッポン歳時記（津田モニカ、ピョトル・ヴジェチョノ、霜田千代麿） …… 4
第 19 代札幌コンサートホール専属オルガニスト マルタン・グレゴリウスさんに聞く（徳田貴子） …… 4
「樺太酋長バフンケ」の髑髏、遺族への返還なるか（井上紘一） …… 6
NHK《ラジオ深夜便》より ポーランドの住所表記（岡崎恒夫） …… 7
第 31 回定例総会議案・2017 収支決算書・2018 会計予算書 …… 〈付録 1〉1
《新刊紹介》ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌（井上紘一訳編・解説） …… 〈付録 2〉1
詩『盲いたシンキンチョウの絶唱』について（井上紘一） …… 〈付録 2〉2

今後の予定

○さっぽろ雪まつり第 45 回国際雪像コンクールに昨年と同じチーム Snow Art Poland が参加、大通西 11 丁目、2018 年 2 月 4 日（日）～8 日（木）

◎《第 82 回例会》コルチャック先生:講演と映画の集い、札幌エルプラザ 4F 大研修室、2018 年 3 月 24 日（土）13:30～16:50、講演:塚本智宏、映画:『コルチャック先生』1990 アンジェイ・ワイダ監督／〈パネル展示〉コルチャック先生の思想と生涯～子どもをいかに愛するか、札幌エルプラザ 2F 交流広場、3 月 16 日（金）～24 日（土）8:45～22:00（日・祝 20:00）

◎《第 83 回例会》朗読会「午後のポエジア」8、2018 年 5 月下旬

♪《創立30周年記念コンサート》、札幌コンサートホール *Kitara* 小ホール、2018 年 6 月 23 日（土）17:00～

◎《第 84 回例会》ブロニスワフ・ピウスツキ没後百年記念講演会、講師:井上紘一、2018 年 7 月

入会・退会（敬称略）

入会（2017.9～12）小林浩子、松山愛羅、松山莞太
退会（2017.12）進藤崇子、藤野知明

ご寄付（維持会費）ありがとうございます（敬称略）

（2017.9～12）(10)田中郁子，(9)ジョーリ市博物館送別会，(7)安藤厚，霜田英麿，(6)松山敏，(4)霜田千代麿，30 周年祝賀会お茶会，(3)尾形芳秀，(2)安藤むつみ，カジミェシュ・コグト，亀岡延枝，小林暁子，佐藤純一，園部真幸，高橋健一郎，田口綾子，中島洋，松山愛羅，松山莞太，山本伸一，(1)秋田正惠，安藤瞬，石澤麻里，薄井豊美，小笠原正明，佐々木保子，高岡健次郎，徳田貴子，富山信夫，西村範子，畑山修，前田理絵，松永吉史，三浦洋，水田香，溝延学　（1口千円）

新年度（2017.9～2018.8）会費納入のお願い

年会費（一般3千円、学生 1,500 円）、維持会費（任意のご寄付1口千円）の納入は、下記にお願いします。

【郵便振替口座】[記号]02740 5 [番号]19735
【加入者名】　北海道ポーランド文化協会

※ 未納分のある方にのみ、個別の納入お願い文と振替用紙を同封いたします。

POLE
第 93 号 ポーレ編集委員会
熊谷敬子／越野剛／塚本智宏／松山敏／ラファウ・ジェプカ

りに高くなります。ポーランドではドレスだけ借りて、小物をネットかお店で買い揃えることが多いです。面倒でも、友達と一緒に行けば楽しくショッピングできるし、買った小物を記念として長く楽しめます。

まとめると、衣装探しに関してはポーランドのほうがレッグワークを要するが安く上がり、衣装も長時間着るので日本のドレスと比べると動きやすくて疲れません。人生に一回だけでもお姫様気分になりたいのなら日本のドレスの魅力がわかります。価格の安さを求めることはできませんが、一カ所で効率的に衣装を揃えられるのは楽ですね。

NHK《ラジオ深夜便》より

イギリス文学に貢献したポーランド人 コンラッド

岡崎 恒夫

皆さんはジョーゼフ・コンラッドという作家をご存じでしょうか。文学事典では英国の作家として紹介されています。特に海洋文学を得意とし、英文学史の中でもその分野では傑出した作家です。

彼の『闇の奥』(1899)という作品に注目したフランシス・コッポラ監督が映画化して世界的な評判を得た『地獄の黙示録』(1979)という映画をご覧になった方も多いでしょう。極度の孤独と寂寥はいかに人間性を荒廃させるかという主題の権化を見事に演じたマーロン・ブランドを覚えていらっしゃる方もあると思います。映画の舞台はベトナムになっていますが、本ではコンゴでの出来事です。

今日はその作家ジョーゼフ・コンラッド(1857–1924)をご紹介します。彼は正にポーランド生まれのポーランド人で、最後までポーランド人であることに誇りを持ち、遺言で、カンタベリー墓地にある墓碑にはポーランド名がポーランド語で記されています。本名はテオドル・ユゼフ・コンラット・コジェニョフスキ、外国人に妙な発音で呼ばれないために苗字以外の名前を二つとって英国名としたのです。

ではどうしてポーランド人のコンラッドが英語で書いた文学が、英国人がこれ以上に豊かな表現を持つ英語はないと言い切り、英語(いわば国語)の教科書にもっとも重要な模範英語として採り入れられているのでしょうか。その謎を解くには彼の生い立ちから見ていくほかありません。

コンラッドは 1857 年(日本ではペリー提督来航の頃)にポーランドの没落した貴族(シュラフタ)の息子として生まれました。父親はロシア占領下でポーランド独立運動に参加し息子が 5 歳のときに流刑になり、一家も父親を追って北ロシア・ヴォログダに移住しました。そこで母親が結核で亡くなり、4 年後に父親も死亡したため、彼はクラクフのおじさんに引き取られました。

寂しさを紛らわせるため、文学研究者だった父親の残した蔵書を片っ端から読破したコンラッド少年は海洋文学に目覚め、海にあこがれて 1873 年 16 歳で故国を脱出しフランス船の船員になりました。

5 年間フランス船で世界中を航海したあと、1878 年(日本の西南戦争のころ)イギリス船に移り、船員との会話で初めて英語を学んだのです。その間世界各地を航海して見たり体験したりしたことが、後の彼の作品の素地となりました。没落したとはいえ当時のポーランド貴族の間ではフランス語、ドイツ語が公に使われ、北ロシアではロシア語を習得したことが彼の文学に幅広さと深さを植えつけました。

こうして大人になってから英語を学び、38 歳(1895)でやっと作家デビューを果たしたのです。すでに数ヶ国語をものにしていたコンラッドは、よほど英語が性に合ったらしく「もし英語で書いていなかったら、私は何も書いていなかっただろう」と言っています。英国船上で、後のノーベル賞作家ジョン・ゴールズワージー(1867–1933)や、『宝島』(1883)の作者ルイス・スティーヴンソン(1850–94)と知り合い、彼らとの付き合いは生涯続きました。

コンラッドゆかりの場所としては、ワルシャワの目抜き通り Nowy Świat 47 に旧居が残っています(写真上、この建物のオーナーはショパンの妹で、ショパンの父親がここで亡くなりました)。またザコパネには彼が晩年滞在したヴィッラ・コンスタンティヌスが残っています(写真下)。

(おかざき つねお)

photo 上 Mateusz Opasiński
下 Maciej Szczepańczyk

《ラジオ深夜便より》

ワルシャワ・フィルハーモニー

岡崎　恒夫

ここポーランドに住んでいて、よくポーランド人から「どうして日本人はそんなにショパンの音楽が好きなのですか」と聞かれます。簡単に答えられる質問ではないので、旋律の美しさのこと、作曲の背景、彼の人生などが日本人の共感を招くのではと答えています。そのショパンをしのんで5年に一度開かれる「国際ショパンピアノコンクール」の会場であるワルシャワ・フィルハーモニーをご紹介します。

建てられたのは 1901 年で、パリのオペラ座を模して造られました。初演はその年の 11 月 5 日で、エミル・ムイナルスキという当時最高の音楽家が指揮をして、ピアノを演奏したのがこれも当代一流のイグナツィ・パデレフススキでした。ちなみにパデレフスキはピアニストでありながら首相にもなった珍しい人で、いかにも音楽立国ポーランドにふさわしい人物だったと言えます。このパリオペラ座風の建物は第2次世界大戦中、ナチス軍の空爆で全壊しました。そのとき楽員の半数が亡くなったそうです。

世界大戦が勃発するまでにこのフィルハーモニーのホールで演奏した人は――指揮者では、オットー・クレンペラー、プロコフィエフ、グリーグ、ラフマニノフ、モーリス・ラベル、カミル・サンサーンス、リシャルド・シュトラウス、ストラビンスキーがいます。

ピアニストでは、ルビンシュタイン、ホロヴィッツ、ウィルヘルム・ケンプ、バイオリニストではヤシャ・ハイフェッツ、サラサーテ、ジャック・チボー、イザイ、チェリストではパブロ・カザルス、ガスパル・カサドと言った世界で最も有名な音楽家たちが綺羅星のごとく次々に演奏を繰り広げていました。

第2次世界大戦で破壊されたフィルハーモニーの建物が再建されたのは 1955 年のことで、名称も一都市のワルシャワ・フィルハーモニーから国立ワルシャワ・フィルハーモニーと格上げされ、同時にフィルハーモニー付きの混声合唱団も結成されました。現在フィルハーモニーは 112 人の楽員と 100 人の合唱団員をかかえています。大ホールと室内楽用の小ホールがあり、大ホールは 1,072 席、小ホールは 378 席を持っています。

現在このフィルハーモニーでは、恒例の「ワルシャワの秋」という現代音楽祭が開かれています。そして、1年後の 2015 年にはショパンコンクールで賑わいます。

フィルハーモニーの主な活動は、1週間のうち定期演奏会は金曜日、土曜日で、木曜日は若者向けの格安コンサート、日曜日は子供向けの特別コンサートが開かれます。私もうちの子供たちが小さかったときこの日曜日のコンサートによく足を運んだものです。演奏中、子供たちが曲に合わせて踊ったり、いっしょに大声で歌ったりしても、誰からも何も言われない楽しい音楽会です。日曜日の 11 時からは 3―6 歳、14 時からは 7―12 歳となっていて、小さい子達は休憩を挟んで 75 分の演奏、大きい子達は 90 分となっています。

私は音楽が好きですから、一年間の通し券（回数券のようなもの）を3種類毎年購入しています。シーズンは 10 月に始まり、終わるのは 5 月なので、ちょうど8ヵ月になりますが、一枚の通し券が7回分ですから、他の特別コンサートを入れるとほとんど毎週通っていることになります。

驚くのはその料金です。座席は4段階に別れていますが、最上席は7回分で 350 ズロティ（1万円くらい）、一番安いのが 200 ズロティ（6千円くらい）、子供用は最上で 125 ズロティ（3,750 円）、安いのが 100 ズロティ（3千円）です。これは年間通し券の値段ですから、お間違いなく。と言うことはこの値段を7（回）で割ると、1回が上から、1,500 円、860 円、子供は 540 円、430 円となります。子供券には大人の分も含まれているので、どんなに安いかお分かりになるでしょう。

フルオーケストラの演奏で、さらに国内外の有名なソリストが出演してこの料金でやっていけるはずがありません。ここで、注目すべきは文化事業に対する国家の補助金です。音楽に限らず、演劇、絵画、その他の文化的催し物への国家援助は膨大で、そうでなければ、国民は気軽に音楽鑑賞など出来ないでしょう。このような処置が取られるのも、国が文化というものを高く評価し、その文化こそが国民社会ひいては人間の尊厳に関わっている事業であることを知っていることに他ならないと思うのです。

岡崎先生に外務大臣表彰

岡崎恒夫先生は「1970 年代から 40 年以上にわたり、ポーランドにおける日本語教育の発展に寄与し、多くの優秀な卒業生を育成し、ポーランドの日本研究・日本語学習の環境を整え、日本文化の普及にも大きな足跡を残されている」ことから、今年度（2014）の「日本外務大臣表彰」を受けられました。伝達式は 10 月 28 日（火）に山中誠大使出席の下、ワルシャワ大学図書館で、第8回ワルシャワ大学日本祭に併せて行われ、ノヴァク・ワルシャワ大学副学長をはじめ、ワルシャワ大学関係者、日本研究者、教え子などが多数出席し、とてもなごやかな会だったそうです。岡崎先生の教え子には、ヤドヴィガ・ロドヴィチ前駐日大使をはじめ、歴代のポーランド大使館文化担当官（ブワシチャク広報文化センター長ほか）、ワルシャワ大学はじめ国内外の日本学科で教えている多くの日本学者がいて、みなさん両国の文化交流にたいへん貢献されています。　（安藤厚）

（写真出所）在ポーランド日本国大使館 HP「ワルシャワ大学岡崎上級講師に対する外務大臣表彰伝達式（10 月 28 日）」／Embassy of Japan in Poland (Facebook) Dyplom Ministra Spraw Zagranicznych Japonii dla Pana T. Okazaki

外務大臣表彰伝達式で 岡崎氏と山中大使（上）／ワルシャワ大学の学生たち（下）

《東京事務所より》

ポーランド大統領訪日記念Jazzコンサート

ポーランド大統領の訪日は延期になりましたが、日米欧混成による訪日記念 JAZZ コンサートは予定どおり 11 月 26 日ヤマハホールで開催され、私も広報文化センターのご招待を受け、所用で上京した兄（副会長）とともに楽しませていただきました。

開演に先立ち、ポーランド民主化 25 周年を記念したコザチェフスキ駐日大使のご挨拶と、そのために作成された、民主化直後の驚きと混乱を示す短い映画も上映されました。大使は私どもの席を一つ隔てて着席され、Jazz がお好きなのかどうかは分かりませんが、演奏中は一切席を立たずに、アンコール演奏まで楽しそうに聴いておられました。

演奏者は、日本人ピアニストのクリヤ・マコトをはじめ、ポーランドを代表するサックス奏者のシルヴェスタ・オストロウスキ、トランペット奏者ピョトル・ヴォイタシック、アメリカ人のベース奏者エシェット・オコン・エシェットおよびドラムス奏者のニューマン・テイラー・ベーカーによるクインテット（5重奏団）です。

この演奏会は欧州ヤマハが協賛しているそうで、やや小柄なピアニストは、ヤマハのフルコンサート・ピアノを、スウィングしながら終始椅子から飛び上がりつつ打鍵している姿が印象的でした。

曲目の中にはスタンダードな聴いたことのある旋律も含まれていましたが、一切の説明なしに、一気にフォルテッシモで演奏して聴衆を圧倒しました。一方、中程ではパーカッショニストが、アメリカの古い洗濯板を、両手の指に金属キャップをはめて、ソロで軽妙なリズムを刻むと、それに呼応して決して響きすぎない音量で、多国籍ユニットのジャムセッションが同調する姿は感動的でした。

実は日頃建築音響に従事しているもので、ドラムや管楽器を多用する Jazz や吹奏楽の演奏は、小規模な音楽ホールでは個々の楽器の音が聞き取りにくくなるという傾向を十分承知して聴いていました。

霜田英麿（本会東京事務所）

新連載《ラジオ深夜便より》

ワルシャワの地下鉄

岡崎 恒夫

今年は 1989 年の民主化からちょうど 25 年目に当たるので、この 25 年間でワルシャワにとって何が一番大事な出来事だったかという市民投票を行ったところ、ダントツで「地下鉄建設」が一位でした。

建設着工が 1983 年、95 年に全路線の半分ほどが開通して、全線開通は 2008 年ですから、着工から実に 25 年かかっています。ところが、その全線というのが1路線 23 キロだけ、端から端まで 40 分弱で行けるのですから驚きです。ロンドン地下鉄の 400 キロ、パリの 201 キロ、東京の 304 キロ、大阪の 129 キロと比べて、小人と巨人の違いです。札幌地下鉄の総路線の半分、東西線の長さとほぼ同じといえば、札幌の皆さんにはわかりやすいでしょう。

その地下鉄建設の計画は戦前からあり、計画されては消え、つぎもまたその繰り返しといった状態でした。こんなに時間がかかった主な原因は、まずポーランドが旧大陸にあるため、どこも砂地ばかりで地盤が極めて弱いことが挙げられます。戦前は地盤を強化するための技術が未発達で計画倒れになりました。着工した共産主義時代は、弱体化した共産主義を回復するための秘策として地下鉄工事を始めたものの、結局財政が持たなかったというのが真相のようです。

着工した当初わが息子は小学一年生でした。わが家から旧市街にある学校までバスで 40 分近くかかるので、地下鉄ができれば渋滞もなく速く学校に行けると期待していたのですが、出来上がったときに彼はすでに 31 歳の社会人になっていました。

全路線 23 キロの間に駅が 21 あります。地下鉄全体の職員は1,700 人で、そのうち140 人ほどが運転手だそうです。毎日 50 万人の乗客を運び、市民の足として大活躍です。

工事が始まった頃、地上の道路は、自動車数が少ないこともあって、渋滞など特別な日にしかありませんでした。25 年かけて建設しているうちに社会主義から自由経済主義に変わり、それに伴ってモータリゼーションが急速に進みました。初めの頃、道路はこんなにガラガラなのに、なぜあちこち道路を閉め、掘り返して地下鉄などを作るのかといぶかっていたのですが、今や地下鉄なら 10 分で行けるところを、自動車だと小1時間かかることを思えば、こういうのを「先見の明」というだと納得しています。

おかざき つねお 1944 年中国・瀋陽（奉天）生まれ、下関で育つ。1970 年よりワルシャワ在住、ワルシャワ大学日本学科講師、東洋学部副学部長を歴任、現在は同特任講師、NHK ラジオ深夜便「ワールドネットワーク」ポーランド・リポーター。

現在ワルシャワでは新たに東西線を建設中です。工事が始まってすでに3年以上経っていますが、川底の下を通らせるという難工事があったりして、開通は延び延びになっていて、これから何年かかるか見通しが立ちません。「来年までにプウ・メトラできる」という、市民の間で流行った笑い話があります。このプウ・メトラの意味は、「地下鉄の半分」という意味と「半メートル」(50 センチ)の意味があります。

では、ワルシャワの地下鉄の長所を市民の声から拾ってみましょう。

その一：スピード。年ごとに長くなる地上の渋滞をよそ目に、地下鉄は確かに早くその上時間通りに運行されるので市民の信頼を勝ち取っています。また地下鉄の駅周辺には駐車場が設けられていて、市外から自動車で来た人が最寄の駅に駐車して地下鉄に乗り換えることが流行っています。ラッシュ時には3分間隔ぐらいで運行されています(これ

ワルシャワの地下鉄

は日本と同じでしょうか)。

その二：車輌も駅も清潔なこと。ニューヨークの地下鉄のような落書きは一つもありません。地下鉄といえば埃っぽかったり、特別なにおいが漂ったりしますが、開業 20 年になろうというのに、ここの地下鉄は全くそんな気配はありません。最新アンケートによれば、車輌内の清潔度は83%、駅は91%が満足しています。私もヨーロッパの多くの国で地下鉄を利用しましたが、確かにワルシャワの地下鉄はきれいです。最近 CNN が選んだ全ヨーロッパで最も美しい 12 の駅の中に入っています。

その三：高齢者、身障者、子供連れの母親、車椅子利用者のためのエレベーターは各駅に複数備わっていて、大変評判が高いです。乳母車や自転車の持ち込み、さらに動物（犬、猫）を連れて乗ることも可です。

各駅のホームのデザインがそれぞれ違うので、駅名を知らなくてもどの駅にいるかわかるように工夫されています。これもたった1路線 21 駅しかないワルシャワ地下鉄の特徴かもしれません。

ただ、いいことばかりではなく、朝晩ラッシュ時の込みようはかつての日本を思いだします。車内の広告も多すぎてあまり評判がよくありません。しかしこんなことも吹き飛んでしまうくらいワルシャワ市民は地下鉄が好きで、もうこれ抜きでの移動は考えられないという人がたくさんいます。

「ラジオ深夜便」と岡崎恒夫先生

ポーランドの言葉も文化を知らないまま、主人について曇り空のもと落ち葉の舞い散るワルシャワの街に足を踏み入れたのは、1976 年の秋でした。当時のポーランドは社会主義国家であったため、自由な日本からまいりました私は種々の習慣の違いに驚くことの多い毎日でした。そのようなときワルシャワ大学の岡崎恒夫先生と知り合い、ワルシャワで生活するにあたっての必要な情報をいろいろ教えていただいたおかげで、一年間のワルシャワ生活を無事に楽しく送ることができました。

あるときふとNHK の深夜の FM 放送を聞いていましたら、ワルシャワの岡崎先生の歯切れの良い、懐かしい声が聞こえました。海外リポーターとしてワールドネットワークを担当されていることを知りました。それ以来、この放送を必ず聞いています。放送予定は月刊誌『ラジオ深夜便』で分かります。

栗原朋友子

新シリーズ《ポーランドからの便り》

日本に親近感を持つ ポーランド人

松本 照男

1. 桜の花咲く国、日本という美称

日本の経済ミッションなどがポーランドにきて、パーティーなどの折り、ポーランド側の挨拶の冒頭で「桜の花咲く日本からお越しの皆様を心より歓迎いたします」という表現にしばしば出会います。単に《from Japan》ではなく「桜の花咲く国」という美称で、ポーランド語では《z kraju kwitnącej wiśni》といいます。他の欧米諸国のどの国が日本をこのような美称で呼んでくれるでしょう？

わたし自身このような表現に何百回となく出会いましたので、あるときそういうポーランド人に「あなたはなぜ日本をそのような美称で呼ぶのですか？」と聞いてみました。「なぜといわれても困りますが、昔

まつもと てるお 1942 年、埼玉県生まれ。明治大学法学部卒、ポーランド政府奨学金を受けて留学、ワルシャワ大学大学院ジャーナリズム研究所修士課程修了、同政治学研究所博士課程中退。ワルシャワ在住のジャーナリストとして活躍。